

4-2. 削減シナリオ

環境基本計画で掲げられた目標「二酸化炭素排出量を平成 15 年度(2003 年)において平成 10 年度(1998 年)の 10%削減」に基づき、削減シナリオを設定します。2003 年及び 2010 年を削減目標の達成状況の評価・見直しを行う年とします。

二酸化炭素排出量は、何の対策も行わない場合、各種の指標を用いて推計すると、1998 年時点で 1990 年比 12%増加、2010 年時点で 1990 年比 35%増加することが見込まれています。二酸化炭素排出量の将来予測に関して、A~C までの 3 つのケースが想定できます。

ケース A) 何の対策も行われず、1998 年以降も増加していく

ケース B) 何らかの対策が行われ、1998 年以降、安定する

ケース C) B よりもさらに対策がすすみ、目標を達成する

【 将来予測に大きな影響を与える主な社会的要因 】

今回の削減シナリオでは森林が有する二酸化炭素の吸収機能については、統一の見解が明確でないので算定に入れていません。温暖化の原因となる二酸化炭素の排出量の増減や吸収については、エネルギー構造や技術革新、交通体系などの社会的要因により大きく影響を受けます。

今後の二酸化炭素排出量の将来予測に、大きな影響を与えられとされる社会的な要因を以下に示します。なお、今回の削減シナリオではこれらの要因は含んでいません。

電力の二酸化炭素排出原単位の低減
森林による二酸化炭素吸収量の算定
交通体系の整備
パーク・アンド・ライドの拡大
モーダルシフトの促進
オムニバスタウン構想の推進
技術の進歩による製品の省エネ化
サマータイム制度の導入

各削減目標における二酸化炭素の必要削減量を、排出量予測に照らし合わせて示すと以下のようになります。

目 標 (2003 年までに 1998 年から 10%削減)

表 4-2-1. 目標達成までの二酸化炭素削減量

ケース	二酸化炭素排出量	必要削減量 (10^3t-C)
A	何の対策も行われず、今後も増加していく	
B	何らかの対策が行われ、1998年以降、安定する	2003年排出量 予測値から 114.57
C	Bよりもさらに対策がすすみ、目標を達成する	2003年排出量 予測値から 251.82

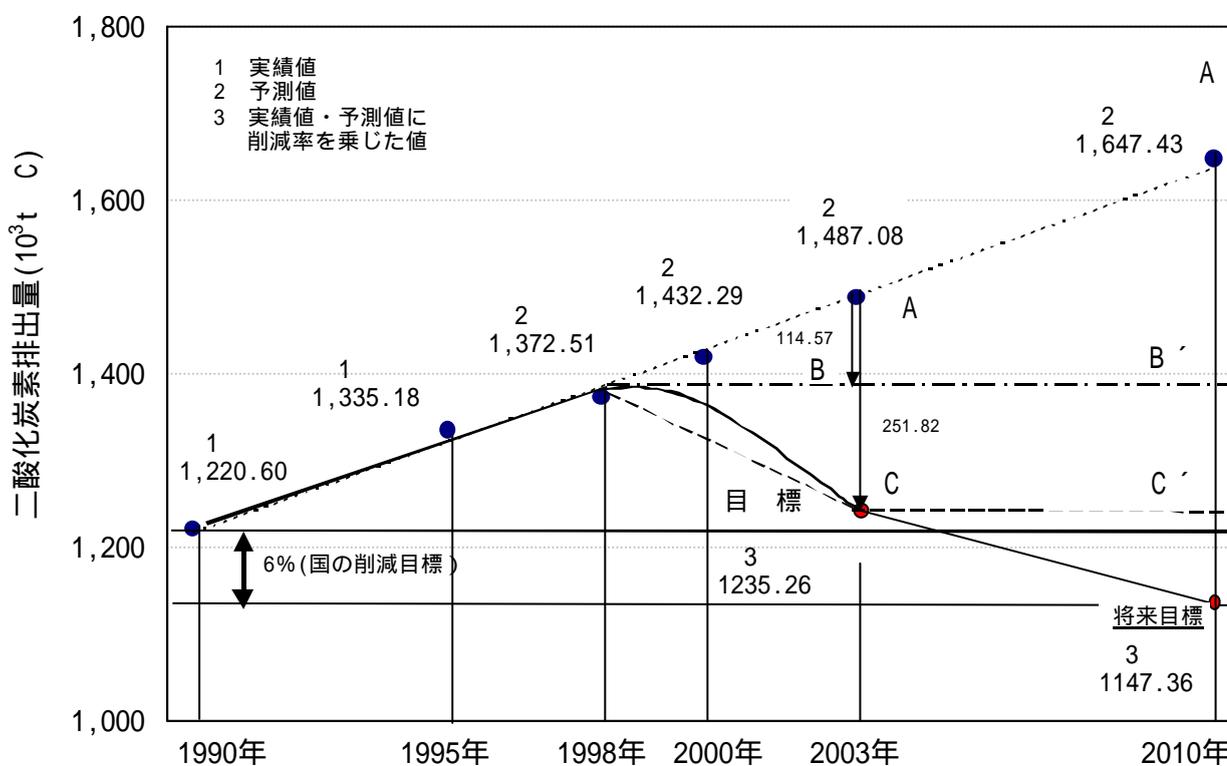


図 4-2-1. 目標達成までの二酸化炭素削減図

将来目標 (2010年までに1990年から6%削減)

表 4-2-2. 将来目標達成までの二酸化炭素削減量

ケース	二酸化炭素排出量	必要削減量 (10^3t-C)
D	目標が達成できず、再度計画を見直す	
C-1	目標を達成し、その後安定する	
C-2	目標を達成後、さらに対策がすすみ、将来目標を達成する	2003年時点の 目標達成後の 排出量から 87.90

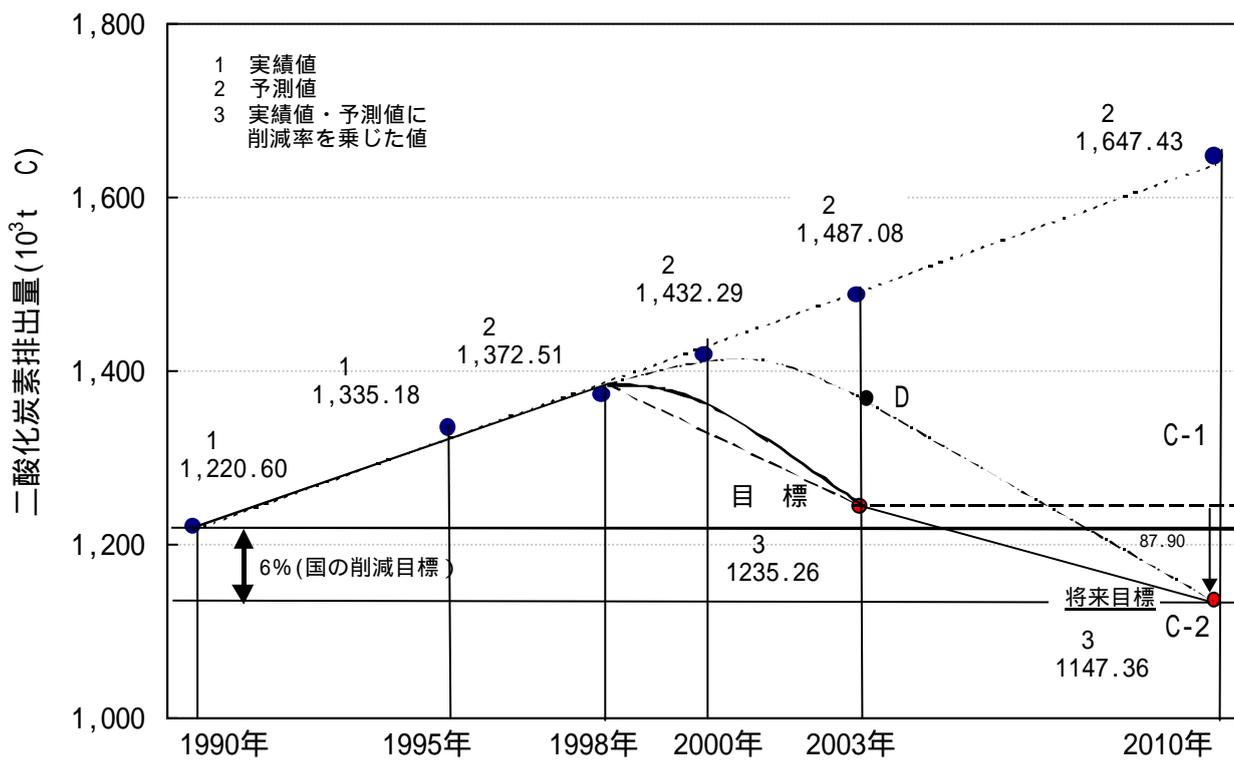


図 4-2-2. 将来目標達成までの二酸化炭素削減図